

第 54 回臨床検査技師国家試験の正答率から見る本校の教育の落とし穴 京都保健衛生専門学校における正答率調査 2 0 校との比較

木村泰¹⁾ 谷口智也¹⁾ 大西英文¹⁾ 石田洋一²⁾
(¹⁾昭和医療技術専門学校 (²⁾京都保健衛生専門学校)

Key words : 正答率格差、低正答率問題、弱点分析

【はじめに】今回の国家試験は、臨床検査技師の第一歩を踏み出す能力を担保するという観点から、適正なレベル水準であった。しかし、出題内容によっては、正答率に大きな格差があり、その問題について正答率の客観的な評価を行う必要がある。そこで、今回、京都保健衛生専門学校の調査資料と比較検討し、本校の教育の弱点を見極め、今後の教育改善に繋げる目的で検討した。

【対象及び方法】 第 5 4 回国家試験問題並び厚生労働省発表による正答率 平成 1 9 年度本校卒業生 8 0 名(A)の自己採点結果と解答分布 京都保健衛生専門学校における国家試験正答率調査 2 0 校(B)をそれぞれ対象とする。 の正答をもとに と の正答率を比較し、20%以上の差異が認められる問題を抽出する。次に、その要因となる原因分析を行い、本校の教育の在り方について考察する。

【結果及び考察】AとBの正答率 20%以上の差異が認められる問題は、午後 7 (A 19% , B 40%)、午後 9 (A 88% , B 60%)、午後 2 8 (A 64% , B 35%)、午前 3 3 (A 67% , B 45%)、午後 3 6 (A 98% , B 71%)、午後 4 0 (A 68% , B 38%)、午後 4 3 (A 86% , B 35%)、午前 7 2 (A 84% , B 62%)、午後 7 4 (A 89% , B 64%)、午後 8 3 (A 30% , B 62%)、午後 9 5 (A 16% , B 41%)、午後 9 8 (A 14% , B 36%)の 1 2 題であった。本校の学生の正答率から、午後 7 は、髄液検査の算定方法の習得がされておらず、午後 9 では逆に媒介昆虫に関わる教育は十分であることを示唆している。

又、午後 2 8 の高い要因は、教育カリキュラムに画像検査を導入し、超音波の教育のみならず、MRI教育にも力を注ぎ、且つ、授業人気度の高い先生が教授していることが原因と考えられる。臨床化学領域 3 1 題は午前 3 3、午後 3 6 , 4 0 , 4 3 を含め、平均正答率 82%と高く、広範囲に亘り学生全体の学力の高さが認められる。その中で、午後 4 0 の T D M の出題では、学生が正答を選ぶ選択肢が的確で、正答でない選択肢 5 を選んで間違えたことはやむを得ないとする。微生物検査領域 2 2 題の平均正答率は、85.5%と、学生全体の習得度の高さを示す。午前 7 2 では、写真の判読、確認培地の判定、菌種の性状問題にも理解度が高く、午後 7 4 の真菌検査の出題においても、菌種の同定が的確であった。一方、午後 9 5 , 9 8 の情報科学では、電子化教育の弱点が浮き彫りとなった。近年の国家試験問題は、出題内容が精査されているため、各学校での教育の在り方を再評価する必要がある。しかしながら、 の医用工学領域 (1 2 題)の平均正答率は 43%と低く、出題内容が適切でないと思われる問題もある。毎年、本校の国家試験正答率は、臨床化学、臨床微生物科目で常に高い水準を示している。一方、本校のコンピュータ教育は、実践的な利用方法を中心に展開し、又、学生の授業評価から医用工学の理解度の低さが明白となった。今後は、医用工学や情報科学領域におけるコンピュータ教育の基礎とは何かを明確にし、その在り方を再検討しなければならない。